

金融経済概観

金融市場動向

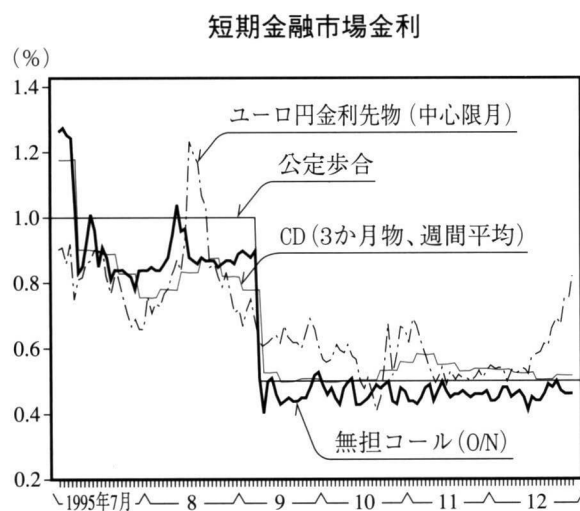
— 平成7年12月 —

(平成8年1月18日)

1. 短期金融市場

12月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、概ね横這いで推移した。CD（譲渡性預金）3か月物レートは、月中を通じ0.5%台で横這い推移した。一方、ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は、中旬まで0.5%台で推移していたが、後半に上昇し、結局0.8%を上回る水準で越月した（なお、14日に限月交替＜中心限月＞96年6月限→96年9月限）。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は、39兆5,432億円と前月（39兆2,106億円）に比べ増加した。



2. 資本市場

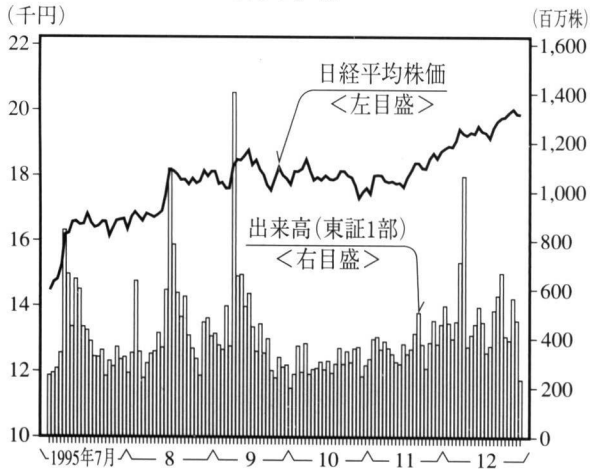
12月の長期国債利回り（174回債）は、月前半は緩やかに低下したが、中旬以降は上昇し、結局2.905%で越月した（前月末2.660%、国債先物中心限月利回りは3.356%＜前月末3.147%＞で越月）。国債の出来高は、現物（店頭取引）、先物ともに前月を下回った。

既発債市場利回り
— 国債市場 —



12月の株式市況（日経平均株価）は、米国株価の堅調等を背景に上昇し、結局19,868円と前月末（18,744円）を大きく上回って越月した。株式出来高（東証1部、月中1営業日平均）は、4.95億株（速報）と前月（3.76億株）を上回った。

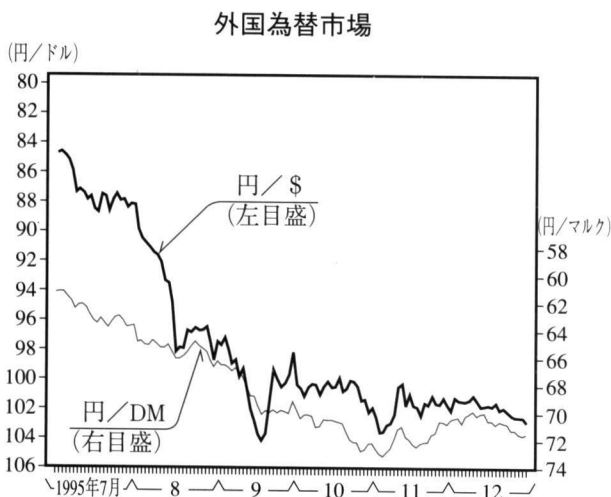
株式市場



12月の国内公募普通社債は、電気、素材関連等を含め幅広い業種で起債がみられ、月中6,210億円(11月4,500億円)と、既往ピーク(6,310億円<95年9月>)に次ぐ高水準の発行となった。一方、国内エクイティ市場での発行(12月払い込み分、増資を除く)は、引き続き低水準となった(11月940億円→12月645億円)。

3. 外国為替市場

12月の円の対米ドル直物相場(東京市場)は、

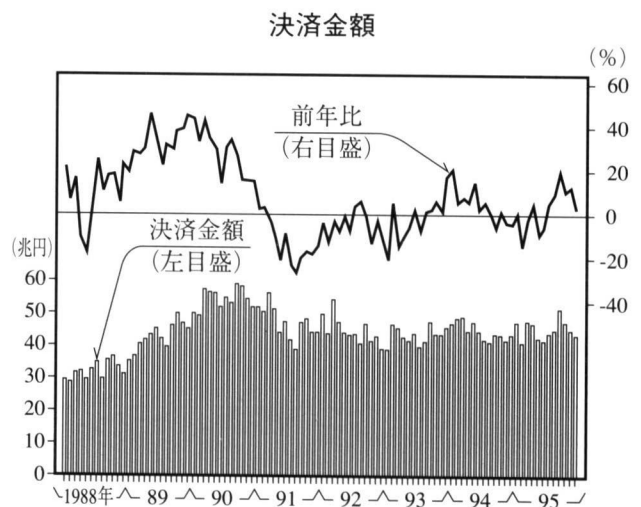


中旬までは概ね100~101円台の比較的狭いレンジで推移していたが、下旬にやや下落し、102.91円(17時時点)で越月した(前月末101.66円)。円の対独マルク直物相場(東京市場)は、月末にかけて下落し、71.61円(17時時点)で越月した(前月末70.89円)。

この間、東京外国為替市場の出来高(円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均)は179.1億ドルと、前月(203.6億ドル)を下回った。

4. 決済

12月の資金決済の金額(1営業日平均)をみると、手形交換高(東京)は前年同月を下回った(前年比△2.2%)が、全銀システム取扱高は前年同月を上回った(同+4.9%)。この間、外為円決済交換高は前年同月を上回った(前年比+3.0%)。また、国債の決済金額(1営業日平均)については、移転登録、振込口座振替ともに前年同月を上回った(移転登録:前年比+41.5%、振込口座振替:同+38.3%)。



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高(東京)、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

12月の資金需給をみると、銀行券要因は7兆1,845億円の不足（前年同月6兆6,266億円の不足）となり、財政等要因も1兆1,861億円の不足（同6,372億円の余剰）となったことから、全体では8兆3,706億円の不足（同5兆9,894億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行は売出手形期日落ち等により資金を供給した。

1月の資金需給（国債発行織り込み前）を窺うと、銀行券要因は冬季ボーナス資金や年末決済用資金の還流が見込まれることから、月中5兆3,500億円程度の余剰（前年同月5兆3,442億円の余剰）となる見通しであり、財政等要因は、受入面で冬季ボーナス等に係る源泉所得税を中心とする税揚げや厚生保険料の受け入れが嵩むこと^{かさ}から、2,400億円程度の不足（同8,760億円の余剰）となる見通し。この結果、全体では、5兆1,100億円程度の資金余剰（同6兆2,202億円の余剰）となるものと予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

11月のM₂+CD平残前年比伸び率は+3.5%（速報）と前月に比べ0.8%ポイント上昇した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+4.3%（速報）と前月に比べ0.4%ポイント上昇した。

12月の銀行券平残前年比は+6.5%と前月（+8.4%）に比べ低下した。

12月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は+3.8%と前月に比べ0.2%ポイント上昇した。一方、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は+2.1%と、前月に比べ0.1%ポイント上昇し、8か月連続の前年比プラスとなった。

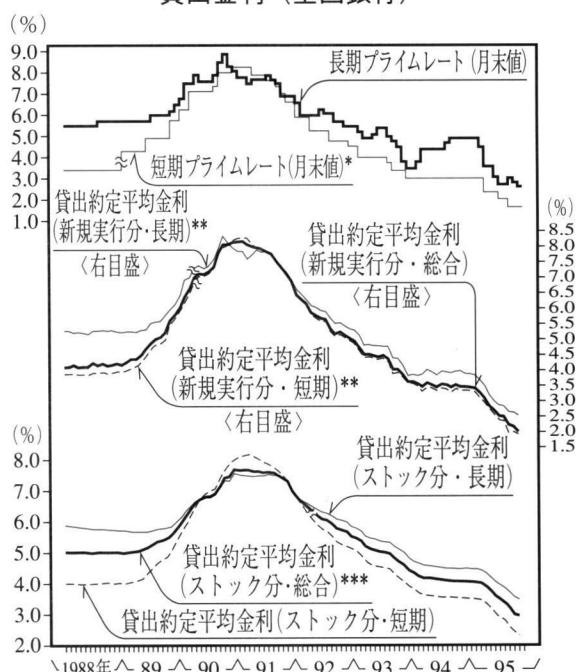
7. 貸出・預金金利

11月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分は、短期（前月比△0.098%）、長期（同△0.080%）ともに低下し、総合でも13か月連続の低下（同△0.097%、10月2.185%→11月2.088%）となり、既往ボトムを更新した。

また、ストック分については、短期、長期、当座貸越ともに低下し（短期：前月比△0.097%、長期：同△0.078%、当座貸越：同△0.100%）、総合では29か月連続で既往ボトムを更新した（総合：10月3.050%→11月2.963%）。

この間、11月の定期預金金利（自由金利分<1千万円以上>、3か月以上6か月未満の全銀新規受入金利平均）は、11か月ぶりに前月に比べ上昇した（10月0.464%→11月0.500%）。

貸出金利（全国銀行）



(注) * 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)